

古代ハヤトとは何者か

— 神武皇后選定の段を

手がかりとして —



中山とし子

プロローグ

奈良県橿原市久米町に所在する橿原神宮は、主祭神を神武天皇とする。記紀によると、神武天皇は紀元前七一一年に誕生し、前六六〇年に即位、前五八五年に一二七歳で崩御したことになる。昨年、二〇一六年は、崩御から二六〇〇年目に当たる。記紀の記述があまりに人間離れしているところから、神武天皇は実在の人物ではないとする見解が現在では主流である。しかし、史実であるとす

る意見も根強い。神武東征の年代が正確に定まらないため諸説が展開されているが、近年、古事記の記述に沿う遺物が発掘され始めている。昭和十三年に始まる神武即位二六〇〇年祭の記念事業で、橿原考古学研究所の末永雅雄所長の指揮による神宮外苑の発掘調査が、関西大学と龍谷大学のチームによって行われ、その地下から縄文時代後期〜晩期の大集落跡と檀の巨木が立ち木のまま、一六平方メートルにも根を広げて埋まっていたのが発見された。この根を全部アメリカのミシガン大学に持ち込み、炭素14による年代測定(註)をしたところ、当時から遡ること二六〇〇年前のものであり、誤差は±200年と判明。この事実から、記紀の神武伝承には史実の反映がある、とする説に現実味が出て来た。明治時代になってから、記紀に記されている【畝火(うねび)の白橿原宮(かしはらのみや)



橿原神宮外拝殿（奈良県橿原市）

にましまして、天（あめ）の下治（し）らしめしき】を基に、民間有志の請願に感銘を受けた明治天皇が、一八九〇年（明治二三年）四月二日に官幣大社として創建されたのが、現在の橿原神宮である。

私は、古事記を偽書であるとする考え方はあまりにも無謀であると考ええる。プロ、アマを問わず数多の論が入り乱れている中、この拙文では、「中つ巻、皇后選定の条」を手掛かりとして、日本語の音韻の変化を考慮しつつ、「隼人」とは何者かを検討し古事記の真意に近づきたい。

一、久米氏と隼人族の位置

『古事記（中つ巻）』の冒頭の神武天皇の条は、神武天皇（註…カムヤマトイハレビコノミコト。正確にはこの時期に「天皇」の呼び名はなく、大王と呼ぶが、ややこしいので、「天皇」と書いておく）の東征物語に続いて、後の選定の物語

となる。霧島の高千穂の宮を出て日向（ヒムカ）を出発した神武天皇の東征に付き従ってきた大久米命（オオクメノミコト）が、天皇に、大后（皇后）とするべき女性を推薦する場面が描かれている。その大久米の命は「鯨ける利目（サケルトメ）」（鯨面文身。刺青の一種）をもっていることから、隼人系と言われている。私は、神武天皇が、大和の橿原の地に落ち着いて後、隼人系である大久米命によって皇后にふさわしい女性のアドバイスを受けることに対して、いくつか疑問を持った。

一つは、時代が下るにつれ記録書に卑しい書き方をされる隼人国人が、古事記の中では、東征する神武天皇の身近にあつて大きな影響力を持つていたことを彷彿とさせること。後の記録書に書かれるように、隼人族は単なる野蛮な未開民族であつたという位置づけで良いのかどうか。古代の隼人とは何者かという

こと。

二つには、大久米命の薦める三島のミヅクヒ（溝咋。人物名）の孫であるホトタタライイスキヒメとその母であるセヤダタラヒメ（註：この人は三輪の大物主命の妻である）の名に「タタラ」が共通してあることの意味。この二つの疑問を検討することで、古事記は単なるおとぎ話ではなく、何らかの史実を反映しているとする立場から疑問を紐解いてみたいと考える。

二、「隼人」を二つに異議分類する

ア、狭義の隼人と広義のハヤト

いわゆる「ハヤト」と呼ばれるものに、九州西南地方に拠点を持っていた特定された海人の部族の呼称と、海を渡ってきて神武東征より以前に日本列島のあちこちにすでに定住していた海人グループの総称、二つの見方で捉えたい。前者を狭義の隼人として、「隼人」、

後者を広義のハヤトとして「古代ハヤト」と書くことにする。

大久米命は、神武東征に日向から日臣命(ヒノオミノミコト。後の大伴氏)と共に付き従って来た者であるから、律令制以後に隼人国人と呼ばれるようになる海人の部族である。従って神武天皇も隼人の地を出自とした海人でないければならない。神武の母は、タマヨリヒメ(玉依姫)であり、タマヨリヒメは、書記巻の第三に【海童ノ小女(ワタツミノオトムスメ) 海神の二女】と書かれているところからも海人の家系である。久米氏は宮廷の軍事を司り、神武東征チームにあつては、天皇に対して大きな影響力を持っていたと理解できる。

ひるがえって、時代が下る律令時代(八世紀以降)の記録に、「隼人」は、次のように侮辱的な記述をされるようになる。【薩摩、大隅らの国人、初め背き、後に服するや、諾講して云

はく。己れ犬となりて、人君に仕へ奉るてへりと。此れ則ち隼人と名付くるのみ】『職員令集解』隼人司条。

記紀編纂の時期(八世紀初)、隼人族は盛んに政権に抵抗し、七百年頃より大隅国を主体にする「ハヤトの反乱」と呼ばれる抗戦が頻発した。歴史は、権力闘争の勝者によって書かれるものであるから、隼人族が古事記の編纂された八世紀には、政権から遠い立場だったことがわかる。朝廷に反抗するものは悪であり、当の政権に蛮族と表記されるのは当然である。それにしても、この表現の仕様は、記紀において天皇家の起源を隼人の地である九州西南部に起こしておくながら、あまりにも侮蔑的ではないだろうか。私はここに政治権力の恣意的な意図を読まないわけにいかない。当代政権にとってその存在が脅威であったし、当時の政権の優位性を示す為の作業が

必要だったのでないかと推察される。隼人族は大和朝廷に服属以後、強制的に大和の地に移住させられたことが、『続日本紀』の靈鬼二年（七一六）、養老元年（七一七）、養老七年（七二三）等の朝貢の記事（資料③その他）等に書かれている。

又、『延喜式』卷二八、「隼人の司」の条には、【番上隼人二十人、今木隼人二十人、白丁隼人百三十二人】が、元日の即位や客が入朝した時などの儀式に駆りだされたことを示しており、今来隼人が【吠声三節発す】とあるのは、いかにもこの当時の隼人族の日常における異人ぶりを伝えているように思われる。

イ、広義のハヤト

しかし「ハヤト」には、もう一つ概念があったと私は考えている。これを広義のハヤトと位置づけ、以後「古代ハヤト」と書く。

私は、ハヤトは渡来系全般と捉えている。

これは南洋系（資料③大林太良「民族学から見た隼人」）と大陸系に大きく分けられるだろうが、いまは紀元前五、六世紀、あるいはそれ以前から紀元後二、三世紀の話で、海を渡ってきた人々が日本列島に住み着いていたと思われ、それらの人々のことを「古代ハヤト」とひとくくりに考えることにする。もつとも、当時は現代人が発する「ハヤト」という発音ではなく、「海人」を表す概念としての位置づけであったことが考えられる。

古代ハヤトは、神武東征以前から近畿一円と言わず北九州や日本海側等、日本列島のあちこちに住み着いてそれぞれ自治を行っていたと考えられる（資料⑦）ハヤトは海人であり、海人は海を自由に渡るのだから、潮に乗って日本列島と周囲の大陸や島々を往来し、土地々の物品や技術を持ち帰っていたと考えられる。当時としては、大変進んだ人々であっ

たはずだ。このような状況では、神武以前にも列島の西方九州地方から東進したグループがあつても不思議ではない。神武天皇の皇后選定のいきさつを述べるくだりから、「隼人族」が、一豪族として九州だけに存在していたと考えては納得のいきかねる部分が生じる。一、二世紀のころまでは「肥人ニクマヒト」と呼ばれていた狭義の隼人族とも類似点を持ちながら、もつと古い時代から日本のあちこちに存在した大きな「古代ハヤト」が浮かび上がってくる。こう考える理由を、先にも上げた二つの疑問点を具体的に検討することで明らかにする。

三、疑問点の検討

①…大和(奈良盆地)に神武が初めて足を踏み入れたとするなら、その随臣である大久米命が、三島のミヅクヒやその女のことなどをよく知っているような書きぶりはなぜか。

なぜ三島のミヅクヒの孫を后とするよう薦めるのか。

ミヅクヒは摂津に住んでいる。摂津は、畿内における山城、大和、河内、和泉、近江、丹波、紀伊等と同じような、主に阿陀隼人の移住地と云われる。又、京都府京田辺市は、大住隼人の移住地である。これらの土地に、律令制以後、隼人国人が初めて強制移住させられたのかというと、これは考えにくい。元々の隼人族の移住地であつたから、そこに更に強制的に移住させたのだらうと思われる。つまり、摂津は早くから隼人族が自然に移住した地であつたと考える。ここに住んでいるミヅクヒは、遠くは隼人一族で、古代ハヤトと位置付けられる。ミヅクヒの拠点三島は、大阪府三島郡に比定され、今も茨木市安威川沿いに溝咋神社が鎮座。又、厠の造りからも海人であると思われ、神武東征以前からそこに

定住していた「古代ハヤト」であると考えられる。

資料⑦『古代日本と海人』は、ミヅクヒが東征チームより早くそこに移住していたと主張する。又、神武東征が隼人族と吉備の連合チームによって行われたとする。(註：吉備系の祭祀遺物である弧文円板(こもんえんばん)が出土しているため) 人と文化の流れが、舟山列島から九州、さらに黒潮に乗って国東半島から瀬戸内海を、あるいは四国沖を廻って紀伊半島に至るとする。彼らは陸地と近い海岸線になぞりながら、時には陸地上がり、そこに滞在してその一族を伴いながら少しずつ東征した。吉備の一族も、古代ハヤトの民が、神武以前から自然な流れとして移住していたその子孫(註：大伴氏)であるとされる。古代ハヤトが、瀬戸内海や畿内の水辺のあちこちに移住していたことは自然であり、拙文では、

これを「古代ハヤト」と仮に名付けているわけである。これに従うと、大久米はハヤトつながりであり三島のミヅクヒについて情報を得られる立場にあつたし、いわば同族であつた。故に、神武にミヅクヒの女との婚姻を薦めるのは自然である。

②…セヤダタラヒメとホトタタライスケヨリヒメに共通する音「タタラ」とは何か。

ミヅクヒが久米と同族の古代ハヤトであることはもちろん、同族だからという以外に、ミヅクヒは何らかの他の古代ハヤトにはない大きな力を持っていたと考えられる。ミヅクヒの娘、勢夜陀多良比売(セヤダタラヒメ)と孫の、富登多多良伊須須岐比売(ホトタタライススキヒメ、または、ヒメタタライスキヨリヒメ)の名に共通の音「タタラ」があることに注目しないわけにいかない。テキストにより「タタラ」の解釈が異なるが、講談社学術文庫の

『古事記』と新潮社『古事記』は、いずれも「タタラ」は【鍛冶に用いる大形ふいこの踏鞴による名】、【ふいこの踏鞴との関連が疑われる】とする。私もこれに賛成である。しかしこれとは別に注目すべきは、古事記では、後に神武の后になるミヅクイの孫、ホトタタライススギヒメ、または、ヒメタタライスギヨリヒメが、日本書紀では、ヒメタタライスズヒメ(媛踏鞴五十鈴媛命) 又はイスズヒメノミコトに名を変えられていることである。このことはとりもなおさず「イスズヒメ」の名が意図的に造られたものという懸念を抱かせ、資料⑤は、天皇家の祖アマテラスを祭る伊勢神宮との深い結びつきを示唆する意図が感じられる、とする。従って書紀の書きぶりはことさらに伊勢神宮を天皇家の系譜に組み入れようとする意識するものとなっており、古事記の立場は、天皇家の祖を渡来系(百済系か新羅系か大陸

系かの見極めは年代が定まらないので不可能)と結びつけることにあまりこだわりをみせていないように思われる。しかし、記紀のどちらも「姫踏鞴」の部分は一致していることから、「タタラ」は金属の鑄造に使うふいこの「踏鞴」であり、ミヅクイが鑄造技術に関係していたことを示す名のりであると考えられる。

以上のことから考察されるのは、三島のミヅクヒは元々は渡来系であり、鉾山と関係するか鉄の鑄造技術までもっていた可能性があるとということ。もともと、その当時、自分たちを「外来」と考えていたかどうかは疑問である。隼人一族は、下つてからは呪術や儀式における舞事を司っていたことが記録されているが、それ以上に、隼人族(二世紀までは肥人(クマヒト=句麗人か?)は、軍事担当が主な仕事である。隼人一族は同じ渡来系の兵器を

作る技術集団と近い関係であつてもおかしくない。当時は鑄造技術はハイテクであつて、これを手に入れることが、すなわち権力を手に入れることであつたわけだから、神武が三島のミヅクヒと結ぶことは、権力を強めるためには必要なことであつた。ミヅクヒが金属の鑄造技術を持つていたことが、娘、孫の名前からわかるわけである。

それに加えて「ホ」は「火」に通じるのであり、やはり踏鞴を使う技術者集団が神武の背後にあり、古事記は素直にそれとの関連を述べたにすぎないのではないか。その集団との提携を意図して、隼人族である大久米が神武にミヅクヒとの婚姻を薦めたという結論に行き着く。

仮説であるが、古事記が述べるところの神武東征とは、大和政権以前に九州で一大勢力を持つていた豪族の東征を象徴する記述なの

ではないか。彼らは、初め、一人の優れたリーダーを中心として東征して来、海岸線のあちこちにバラバラに定住していた大伴氏のよいうな先住古代ハヤトをも加えながら、百年以上かかって紀伊半島に至つた集団と推定される(註:神武天皇は、二七歳まで生きたとされる)。

ミヅクヒも久米も渡来系であり、古代ハヤトそのものが、祖は海を渡つてきた渡来系の海人であることになり、古代の大王(註:天皇の命名は、奈良時代後期、四十代天武天皇から)も同じであろう。大久米がミヅクヒの孫にあたるホトタタライスケヨリヒメ(註:日本書紀では、ヒメタタライスケヒメノミコト)媛踏鞴五十鈴媛命と変えられる)を神武に薦めるのは、自分と同系統の部族であり神武とも近い技術集団と手を結ぶことを意味している。

また外来の権力者は土着の実力者の女を娶るとするルールがある。ホトタタライスケ

ヨリヒメは、三島の孫であると同時に、朝鮮半島から渡来してきた陶器生産者の流れをくむ三輪の大物主の娘にあたる。神武の婚姻譚は、三島の金属鑄造技術集団と三輪の百済系陶器文化を持つ部族、そして西からあちこちの土地の氏族をも加えながら上がってきた新興集団が、互いに手を結んで政権を作り上げたことを表している。いわば、大和政権とはオールジャパンである、ということを書き記した編纂者は意図したのではないだろうか。神武のもとでの居住地とされる日向は、大和地方よりも早くから鉄の文化を持っていたとされ、三島は、いわば親戚のようなものだったと推定される。

四、結語

以上の疑問点を考察する過程で「隼人」と「古代ハヤト」の関連性やその様相を検討してきたが、いわゆる律令制の始まる前と後と

で包括する意味は異なるのではないかとこの結論に達した。「隼人」と漢字を持つて侮蔑的に呼ばれ出したのが、七世紀の後半天武朝からである。この場合の「隼人」とは、南九州の特定の氏族を指す。神武東征のころより存在はしていたが、そのころは「ハヤト」とは呼ばず肥人（クマヒト）とある。同時に渡来系の「海人」の一団が列島のあちこちに定住していて、次第に地歩を固めていった。この人々のことを早い時期には、海の民を表す言い方で呼んでいたのだろうが、定住すればそうは呼ばれなくなり、反対に、大和政権が成立した後も政権に随うことをしなかった「クマヒト」は、「隼人国人」として特に天武朝以後、征伐を受ける。天武朝と隼人族の祖とは出祖が違うか、あるいは、政権が隼人に繋がることを消す必要が生まれたことが考えられる。日本国として系譜を整え、対外的に（主に中

国に) オールジャパンとして一つにまとまっている形を示さねばならないのに、東北の蝦夷と隼人族だけが従わないことは国益を損ずる。外国に付け入る隙を与える。そこで八世紀初頭、隼人司が設けられ、政権の締め付けが厳しくなっていく。今で言うグロバリズムの波が、政権から地理的に遠い地域にも攻め寄せたという構図だろうか。その頃の記述には隼人が朝貢に苦慮する姿や、野蛮人であるかのような姿、天皇の従順な下僕といった記述が見られる。あえてこのように書かずにはおられなかった政権側の事情が垣間見える。隼人の朝貢は大化前から始められ平安朝まで続く。これほど長い期間は、隼人国だけである。天皇家と隼人族との密接な関係を示しているように思われるのだが。

古事記と日本書紀は編纂の立場が異なるようで、特に神武天皇の条に限ると、古事記

では渡来系を排除するかのような記述は見られないのに対して、日本書紀においては、古事記の記述の仕方とは変えられている。詳細はこれからの研究に待たねばならないが、海を渡ってきて海上事情に詳しい人々のことを早くから海人と呼び、「ハヤト」に近い音で呼んでいたのではないか。その海人にも、朝鮮經由の中国系あり、新羅系あり、百濟系あり、南洋系あり、台湾、中華系ありと、様々であつたろう。が、その人々が長く日本列島に住んでおれば、次第に祖を同じとする者同士が固まり異部族とも婚姻関係を結び、土地の部族としての地歩を固める。七世紀末から八世紀には、九州西南部の端にいて政権に服属を拒んだ人々が一族として、「隼人」の字を当て「隼人族」という単位で呼ばれたが、これ以前には、広い意味の古い渡来系を概念としてハヤトと認識していたのではなかった

か。

次に、日本語史の立場から「ハヤト」は、「海人」(ワタヒト)ではないかと仮定し、「ハヤト」の語義語音を遡って検討する。

五、日本語史から推理する「ハヤト」の起源 — 仮説

秦氏は大陸の様々な技術や文化を日本にもたらした中国系の氏族で、百済経由で日本に帰化移住したと言われているが、いまだに正確な事はわかっていない。秦氏とゆかりのある地には海人がいて古代ハヤトのゆかりの地ともなっている。

ハヤヒトのハヤ【HAYA】とハタ【HATA】のH音は、古代からP→PH (f)→H (h)と変化しているから(註:P音考。上田万年)、古代の「ハヤ」は【PAYA】又は【PHAYA】、「ハタ」は【PATA】又は【PHATA】であった可能性が高い。「秦」を古代朝鮮でどの

ように発音したか考慮する必要があるが、ハ

ヤトは【PHAYAPHITO】の【PHI】が脱落して無声化し、【PHAYATO⇨フアヤト】になったときにはYは半母音だから次の音素に組み込まれる。するとPHAYATO⇨PHATOとなり、PHATAとは最後の母音OとAの違いだけとなる。現在の分析方法に従えば、二つの母音は調音点は後舌でほぼ同じであり、普段の会話ではOは唇の開きが半狭音であるが、大きく延ばす音になると半広音となってAの延ばす音と違いが聞き分けにくいところから、【PHATO (ナト)】と【PHATA (フタタ)】は音声的には大変近い音になる。日本語史の立場からは、意味的にも類似のものを表す言葉だった可能性が高い。ハタ(パタ)が古代朝鮮語で海を意味するという説があるが(資料⑨その他)、ハヤトも海の民という意味ではなかったのだろうか。万葉時代は「海」

のことを「わた」と発音したらしいことが万葉集にあり、「ハヤト」は「ワタの人」＝「海の人」と言う意味に解される。「ハヤト」はすなわち「海人^{わたひと}」と考えても良いのではないかと思われるからである。更に詳細な調査検討が必要ではあるが、一つの仮説として考える。

(エッセイスト)

【文献・資料】

- ① 『古事記(中) 全訳注』次田真幸 講談社学術文庫 一九八〇
- ② 『古事記』日本古典文学全集1 山口佳紀・神野志隆光校注 小学館 一九九七
- ③ 大林太良編『日本古代文化の探求 隼人』社会思想社 一九七五
- ④ 中村明蔵『南九州古代ロマン ハヤトの原像』丸山学芸図書 一九九一

- ⑤ 千田稔「伊勢のアマテラス」『環シナ海文化と古代日本』人文書院 一九九〇
- ⑥ 菅野雅雄「神武皇后説話の形成」『古事記説話の研究』桜風社 一九七三
- ⑦ 黒住秀雄・薬師寺慎一・藤岡 章『古代日本と海人』大和書房 一九八九
- ⑧ 中村明蔵『クマソの虚像と実像』丸山学芸図書 一九九五

註・「炭素14年代測定方」とは、動植物の内部における炭素14の存在比率が死ぬまで変わらず、死後は新しい炭素が補給されなくなるため存在比率が下がり始める。この性質と炭素14の半減期が5730年であることを利用し、有機物の年代測定を可能にする方法。

